福島子どもプロジェクト２０２３夏

夏の広島を舞台に、学び体験する
ピーススタディーツアー

活動の記録

PEACE BOAT

PBV
ピースボート
災害支援センター

みなみそうま
こどものつばさ

福島子どもプロジェクトとは

２０１１年の東日本大震災と原発事故直後、福島県の子どもたちは「屋外で十分に身体を動かせない」「仮設校舎や避難先で落ち着いて勉強できない」など厳しい生活環境を余儀なくされました。

そこでピースボートは、子どもたちに夢と健康を届けたいとの思いから、保養と国際交流体験を提供する「福島子どもプロジェクト」を震災直後に立ち上げました。そして、船上での体験プログラムや滞在型の環境学習など、さまざまな取り組みを実施してきました。このプロジェクトは、南相馬の子どもたちに保養や教育を提供するＮＰＯ「南相馬こどものつばさ」など現地パートナー団体と協力しつつ、ピースボートとピースボート災害支援センター（ＰＢＶ）が共同で実施しています。

福島の子どもたちが置かれた状況は、時間と共に変化し複雑にもなっていますが、ピースボートは子どもたちのさまざまなニーズを聞き取りながら、支援活動を続けていきます。

プロジェクト呼びかけ人

鎌田實（諏訪中央病院名誉院長）

香山リカ（精神科医）

田中優（環境活動家/未来バンク代表）

現地パートナー団体

当プロジェクトは、２０１１ 年の初回より、「南相馬こどものつばさ」とのパートナーシップにより実施しています。同団体が、ピースボートとの綿密な協議のもと、子どもたちの選考と送り出し、学校との調整、引率者の派遣を行っております。

特定非営利活動法人　南相馬こどものつばさ

東日本大震災による原発事故発生後、放射能の影響により戸外での活動制限が続いていた子どもたちを、心身ともに解放したいとの願いから２０１１年６月に発足。市内小中学校ＰＴＡ連絡協議会のメンバーと県外の支援者が手を結び、学校の長期休暇期間に保養を目的とした林間・臨海学校を提供する活動を続けている。

https://www.kodomonotsubasa.com/

福島子どもプロジェクトのこれまで

これまでにのべ１００名以上の子どもたちが、福島子どもプロジェクトに参加しました。

「夏休みアジアクルーズ ２０１１」（２０１１ 年７～８月）
南相馬市の中学生４９名がピースボートの船旅に約一週間参加。ベトナムでの枯葉剤被害者との交流や、スリランカ大統領夫人との面会、２００４年のスマトラ島沖地震による津波の被害者とも交流。

「夏休み 福島×ベネズエラ音楽交流プログラム」（２０１２年７～８月）
福島の高校生７名がピースボートの船旅に約一か月参加。米国やメシキコで現地楽団と合同コンサートを行ない、船上でベネズエラ「エル・システマ」のメンバーと交流。帰国後には歌手の加藤登紀子さんやＮＴＴ東日本東京吹奏楽団のメンバーらを交えたコンサートを東京都内で実施。

「２０１３春 in オーストラリア」２０１３年３月）
南相馬市の中学生１２名がオーストラリアの家庭でホームステイを行う。現地の学校訪問や風力発電施設やパーマカルチャーガーデンでの環境教育等を通して、持続可能な地球の未来について考えた。

「２０１４春:異文化を体験するアジア国際交流の旅」（２０１４年３月）
南相馬市の中学生１２名がピースボートの船旅に参加。シンガポールでのアート・ワークショップ体験や、スリランカの津波経験者との交流を行う。

「２０１５年 春:海でつながるアジア 自然と歴史を学ぶ旅」（２０１５年３月～４月）
南相馬市の中学生１２名がピースボートの船旅に参加。韓国の済州島では火山島の森のトレッキングや餅作り体験を通して自然との共存について、広島では原爆ドームなどを訪れ戦争と平和について学びました。

「福島子どもプロジェクト２０１６年夏　平和なアジアは友達作りから」（２０１６年７月～８月）
南相馬の中学生１１名、熊本地震で被災した南阿蘇村の小中学生２５名がピースボートの日韓クルーズに参加。船内で多国籍の参加者と交流、長崎の平和公園、沖縄では南部戦跡を訪れ、平和について考えました。

「福島子どもプロジェクト２０１７年夏　南相馬から世界へ 海で繋がるロシア・韓国・日本」（２０１７年７月～８月）
南相馬市の中高生１１名がピースボートの日韓クルーズに参加。船内での国際交流だけでなく、韓国の麗水では歴史を学び、ロシアのウラジオストックでは地元のボーイスカウトのサマーキャンプに参加し、異文化体験をしました。

「福島子どもプロジェクト２０１９年夏　東アジア国際交流の船旅」（２０１９年８月）
南相馬市、相馬市の中学生３名がピースボートの船旅に参加。海道では泊原発を見学し原発について考え、暮らしとエネルギーについて学びました。宮城では石巻市の街歩きを通して、津波の被害と復興について考えました。

「福島子どもプロジェクト２０２２年夏　世界遺産の厳島神社、原爆ドームへ行く広島・夏のピーススタディー」（２０２３年８月）
南相馬市の中学生２が広島でのスタディツアーに参加。平和式典を行う前後の広島で、戦争遺構巡りや被ばく証言などに耳を傾け、広島の文化や歴史を学ぶとともに、改めて、日本や世界の平和について考えました。

福島子どもプロジェクト２０２３夏

昨年に引き続き、広島へのスタディツアーを行いました。今年は「夏の広島を舞台に、学び体験するピーススタディーツアー」をテーマに、原爆資料館訪問や被爆証言聴講などを通しての平和学習はもちろんのこと、自然豊かな似島でのフィールドワークや体験教室など、学びも遊びもたっぷり取り入れたプログラムを実施しました。

◆プロジェクト実施

２０２３年８月３日（木）～２０２３年８月７日（月）　／　４泊５日

◆行程概要

日付	活動内容
８月３日（木）	男山八幡神社で出発式、南相馬市出発。 陸路にて仙台空港へ、空路にて広島空港経由し、陸路にて広島市内へ 広島市内散策
８月４日（金）	本川小学校資料館見学。 平和記念公園ガイドツアーに参加 被ばく体験聴講、平和記念資料館訪問
８月５日（土）	似島にて平和学習、体験教室 （島内の戦争遺構巡り、似島の歴史学習） 柑橘畑での摘果作業、バームクーヘン作り体験
８月６日（日）	広島平和式典見学 宮島観光 とうろう流し見学
８月７日（月）	陸路にて広島空港へ 空路にて仙台空港を経由し、陸路にて南相馬市へ 男山八幡神社で解団式

◆参加者（※五十音順）

・加勢琉唯　（南相馬市立原町第一中学校：３年）
・後藤想來　（南相馬市立原町第一中学校：１年）
・半杭真生　（南相馬市立原町第一中学校：３年）
・藤田玲音　（南相馬市立原町第一中学校：１年）
・松岡伶　（南相馬市立原町第二中学校：３年）
・水戸稀聖　（南相馬市立石神中学校：１年）
・横井惣右介　（南相馬市立原町第一中学校：３年）

◆引率スタッフ

橋本舞　（ピースボートスタッフ）／佐藤慎司　（南相馬こどものつばさ）

◆ピースボート事務局

越智信一朗／畠山澄子／川崎哲（コーディネーター）

活動の記録

◆８月３日（木）／１日目

早朝、男山八幡神社に集合し出発式を行いました。車と飛行機を使用し、広島空港へ。参加者７人中６人が初めての飛行機。上空１０，０００ｍからの眺めは、まるでジオラマを見ているかのようでとても楽しかったそう。

本日はプログラム初日ということで初めての広島を楽しんでもらうべく、昼食では名物のお好み焼きと牡蛎を堪能し、その後は広島城や広島護国神社を訪れました。天守閣から広島の街を眺めたり、甲冑の試着をしてみたり。福島よりも暑く感じる広島を動き回り、食べ盛りの中学三年生は、おやつにたこ焼きやアイスをペロリ。

広島市内を散策した後はゲストハウスへチェックインし、オリエンテーション。参加者７名と引率スタッフ２名の全員が揃った場として、改めて自己紹介とツアーの中で何を楽しみにしているのかを共有しあいました。ワクワクドキドキのスタディーツアーの始まりです。

◆８月４日（金）／２日目

まずは爆心地から一番近い小学校である本川小学校平和資料館へ。ここは「はだしのゲン」の舞台ともなった小学校として有名です。その後は、被爆者の伊藤正雄さん、被爆二世の横山マサ子さんの二人にガイドをしてもらいながら平和公園内の遺構を巡りました。「原爆のことを思い出したくない」「崩壊の危険がある」という理由で、取り壊される予定だった原爆ドームがなぜ残されることになったのか、日本人だけではなく国籍を問わずたくさんの人が原爆の被害にあったこと、一家や親戚全員が亡くなったため、今も引き取り手のいないお骨が収められていることなどを学びました。

昼食後は、伊藤正雄さんの被爆体験を聞きました。伊藤さんは被爆当時４歳、爆心地から３．５km地点の自宅前にて被爆しました。原爆によりお兄さんとお姉さんを亡くし、お父さんも放射能の影響で「原爆ぶらぶら病」を発症します。その後、家業が倒産し伊藤さんは高校を中退し、家族で夜逃げのように引っ越しを余儀なくされます。勤めた会社の寮に入り、朝早くから夜遅くまで肉体労働をしていた伊藤さん。その過酷な状況が影響し、結核を発症します。

当時は「死の病」とされていた結核ですが、これまでの生活と一変した「三食昼寝付き」の入院生活は、伊藤さんにとってはまるで天国のようだったそうです。入院してから 2.3 か月経ったこ

ろ、アメリカの団体から結核の特効薬であるストレプトマイシンと聖書が送られてきて、半年ほど投薬治療を受けました。送られてきた聖書を読んでいた時、「汝の敵を愛し、迫害する者のために祈れ」という言葉が目に止まります。「いったい誰のせいでこんな状況になったと思っているんだ。それを引き起こした相手のために祈れというのか」。伊藤さんは怒りで聖書を壁に投げつけたといいます。

その後、投薬治療が効き健康を取り戻し退院した伊藤さんでしたが、戻る家も職場もありません。その状況を知った母方の祖母が引き取ってくれたそうです。再び高校に通い始めた伊藤さん。家の近くにキリスト教会があり気が付けば毎週日曜日に通うようになっていました。その後周りからの勧めで、ピースボランティアとしてさまざまな国の人と関わるようになりました。一度は怒りで聖書を壁に投げつけた伊藤さんでしたが、「汝の敵を愛せよ」という言葉の意味を今一度考えるようになり、今では「報復の連鎖では決して平和は訪れない。私が本当に憎むべきはアメリカ人ではなく、戦争そのものなのではないか」と気づいたと言います。

午前中の平和公園ガイドではニコニコしていた伊藤さんが、聖書を壁に投げつけたことがあることや、こんなにも大変な経験をしていたことに中学生は驚きました。伊藤さんは「これからは君たちが主役の時代になります。どうすれば戦争を繰り返さないようになるのか考えてほしい」と、中学生たちに投げかけました。

その後訪れた平和資料館では、たくさんの展示を見ました。午前中のガイドツアーで聞いていた遺品の一つである黒く焦げたお弁当箱や、白い壁に残った黒い雨の跡を実際に見ることが出来ました。教科書やテレビでは知ることが出来なかった当時のリアルな状況を残した写真や絵を見ることが出来たり、授業で習った理科の知識が戦争と繋がることを実感したり。たくさんのことを学んで感じ、頭をたくさん使った一日となりました。

◆８月５日（土）／３日目

３日目は広島港（宇品港）からフェリーで２０分の似島へ。瀬戸内海にある似島は当時、最大最新鋭の陸軍検疫所がありました。また原爆直後は、たくさんの負傷者が運ばれ野戦病院となった島でもあります。

午前中は「似島歴史ボランティアの会」の宮崎佳都夫さんと秋月敏勝さんにガイドをしてもらいながら、島の戦争遺構をめぐりました。原爆遺構と比べると似島の戦争遺構は手入れされてないものも多く、山を分け入った中に残されているものも多くあります。ガイドの秋月さんは「語り継ぐ人がいなくなり手入れもされなくなってしまうと、こういう戦争遺構はどんどん自然の中に埋もれて行ってしまう。だから語り継ぐことが大切なんだよ。原爆のことを世界に伝えることも大切だけど、それ以外のこともしっかり知っておいてほしい」と話してくれました。また検疫所ができた背景として、戦地へ行った１万７千人の兵士のうち１万１千人が病気のコレラで亡くなったため、その病気を日本国内に入れないためにできたという事実を知り驚いた中学生も。

昼食は、皆の皆さんが作ってくれた郷土食をいただきました。「もぶりめし」というエビやしいたけ、ゴボウなどが入った混ぜご飯や、島でとれた野菜などを堪能しました。
午後からは、柑橘畑での摘果作業や楽しみにしていたバームクーヘン作り。似島は捕虜としてつれてこられていたカール・ユーハイムさんがこの島で焼いたのが日本で最初のバームクーヘンという歴史があります。

みかんが木になっているのを初めて見たり、レモンは葉っぱからもレモンを香りがすることを知りました。また、バームクーヘンは生地作りから体験。みんなで材料の重さを測ったり卵を黄身と白身に分けたり、生地を混ぜるのも交代しながら行いました。生地ができた後は実際に焼き作業へ。竹に少しずつ生地を付けて、焦げないように回しながら焼いていきます。火の近くは熱くて「熱さで髪の毛が抜けるかと思った」「初めての作業だったので本気で集中していた」と振り返る中学生も。

自分たちで焼いたバームクーヘンは絶品。切れ端や竹についた薄皮も奪い取るように食べました。また柑橘畑で摘果したレモンをいれた手作りのレモンスカッシュや島で撮れた野菜やフルーツなど、たくさんのおもてなしをしていただき島の方の温かさに触れる一日となりました。

◆８月６日（日）／４日目

この日は平和記念式典が行われる日です。新型コロナ感染症による制限は解除され規模縮小前の例年と同じ規模で開催されるということもあり、７時台にはすでにたくさんの人がおり、交通整理やセキュリティのスタッフも多く、特別な日だというのを実感しました。一般参列席はすでにいっぱいだったため、原爆の子の像近くの木陰から式典を見学。遠くからですが岸田首相の姿も見ることができました。

式典後は路面電車とフェリーを乗り継いで宮島へ向けて出発。「宮島も似島と一緒のような島なの？」「どんなお土産が買えるの？」初めて行く宮島にみんなワクワクです。宮島では厳島神社を参拝したり鹿とたわむれたり。隣に行っても逃げない鹿とツーショットを撮る中学生も。昼食後は自由時間もとり、家族や友達へのお土産を買ったりもみじ饅頭を食べたりとたっぷり宮島を楽しみました。

宮島を楽しんだあとは、灯篭流しを見学するために再び広島市内へ戻り平和公園へ。夕方になっても人は多く、テレビの生放送なども行われていました。中学生は生の池上彰さんや桝アナウンサーを見て大興奮。
今年は自分たちで灯篭を流すことができるということで、思い思いの願いを書いた灯篭をもって流灯ゾーンの列へ並びました。流し終わった後にもう一度列を見てみると、自分たちが並んでいたころよりも長い列ができていました。

夕食後にもう一度平和公園を通ると、だんだんと暗くなる平和公園に灯篭が映えてとてもきれいでした。同じ広島の中でも、祈りに包まれている平和公園の落ち着いた雰囲気と、観光地として明るい印象の宮島の対比を感じたり、平和記念式典で子ども代表の挨拶の中にあった「平和とはなんですか」という言葉を思い出したり、今日もたくさんのことを感じた一日となりました。

◆８月７日（月）／５日目

４泊５日のツアー最終日。たくさん学んだこと、体験したことなどの思い出とともに、バスと飛行機を乗り継いで南相馬市へ帰ります。出発式と同じ男山八幡神社で解団式をおこないました。

◆８月２３日（水）

南相馬市長を表敬訪問し、プロジェクト報告をおこないました。今回のツアーでどんなことを学んだのか、どんなことが印象に残っているのかをそれぞれの言葉で報告しました。門馬市長より「県外に出ることでより南相馬市の良いところが見えてくる。今回の経験を活かして、ぜひ南相馬市を盛り上げてほしい」との言葉をいただきました。

メディア掲載情報

２０２３年８月２６日（土）：福島民報 掲載

広島市訪問の報告に訪れた中学生ら

平和への思い強く

南相馬 広島、長崎派遣の小中学生

市役所で成果報告

南相馬市の小中学生は８月、広島市や長崎市を訪れるツアーに参加し、平和の大切さを学んだ。参加者が23日に市役所を訪れ、門馬和夫市長や大和田博行市教育長に成果を発表した。

広島市へのツアーは国際交流NGOピースポートとピースポート災害支援センターが主催し、中学生7人が参加した。3日から7日までの日程で平和記念公園や平和記念資料館、被爆者の治療や介護が行われた似島などを訪れた。6日は平和記念式典を見学し、黙とうをささげた。

市役所を訪れた7人のうち、松岡怜さん（原町二中3年）は「原爆被害の規模の大きさを知り驚いた。二度と繰り返してはいけない」と話していた。

長崎市へのツアーはシンガー・ソングライターのさだまさしさんが企画するNPO法人ナガサキピーススフィアー員の火運動の招待で行われた。小中学生14人が、原爆資料館や軍艦島資料館、さださんが所有する詩島（うたじま）などを訪れた。

市役所には参加者を代表して佐藤瑚夏さん（小高中2年）、泉田康貴さん（原町一小6年）が訪問した。2人はツアーを振り返る写真の冊子を門馬市長、大和田市教育長に手渡した。佐藤さんは「広島と長崎の原爆の違いなどを知り、恐ろしさを学んだ」と報告し、平和の大切さをかみしめた。

両ツアーとも、南相馬市のNPO法人こどものつばさが参加者の募集や取りまとめに協力した。

長崎市での感想を述べる佐藤さん（右）と泉田さん

助成金情報

今回のプロジェクトは、パルシステム連合会の「東京電力福島第一原子力発電所事故被災者応援金」を使用し実施しました。この助成金は、今も続く原発事故の被災者や避難者を対象とした保養活動や甲状腺検診といった支援のほか、原発事故を語り継ぐシンポジウムの開催費用などに活用されています。２０２３年６月時点で、パルシステムグループから推薦された２５団体へ配分されました。

2023 年度配分先報告
https://information.pal-system.co.jp/press/20220626-supportfukushima/

旅の成果

・被爆体験者から当時の話を聞いたり戦争遺構を見たりして、戦争や核兵器による被ばくの影響などの知識を深めました。
・深めた知識やヒロシマを訪れ経験したことから、どうすれば世界から戦争や核兵器をなくせるのか、平和とは何なのかを考え、他の参加者と意見を交換しあいました。
・日常とは違った環境で、新しい仲間や現地での出会った人との交流を楽しみました。

◆参加した子どもたち、保護者の声　（感想文より一部抜粋）

「今回学んだことを友達に伝えて、『核兵器を無くすではなく戦争自体を無くすには』を一緒に考えていきたい」

「初めてのバームクーヘン作りがとても楽しかったし、宮島にあんなに鹿がいるなんて知らなかった」

「戦争に関するニュースを見たときに、これまでとは違った思いでテレビを見るようになったことや、自分が広島で学び感じたことを話してくれるようになりました。」

「子どもの話を聞いて、自分が修学旅行で広島に行ったことを思い出し、改めて平和について考えるきっかけになった」

「コロナ禍で旅行も行けなくなり不便なことも多かったが、今回参加して、自由に旅行が出来ることが当たり前じゃないこと、多くの人々の手助けがあることを学んで帰ってきてくれました」

◆引率スタッフより

中学生とはいえ、平和学習は内容的にも難しい部分があったと思います。それでも、平和公園や似島のガイド中はしっかり耳を傾け、時にはメモを取りながら真剣に話を聞いていました。また、資料館に展示されている写真や式典当日の現地の雰囲気などから「ここはふざけないで真面目に過ごすところなんだ」と感じてくれた子もいて、私自身も改めて「現地を訪れその場を感じる大切さ」を再認識しました。

原爆の構造がすでに授業で習った内容だったり、宿泊したゲストハウスは海外観光客が多く英語で話しかけられたりと、日常の授業で学んだことを活かす出来事が多かったようで、学校での授業も大切だということを学んだと教えてくれました。

平和学習以外の部分を楽しみにしていた子どもたちが、少しずつですが着実に「平和とは」を考えるようになった姿を嬉しく思いました。

（ピースボートスタッフ：引率スタッフ　橋本舞）

昨年に引き続き、夏の広島ピーススタディーツアーを開催することができたことは、大変有意義なことでした。東日本大震災と原発事故から１２年が経過しました。今回参加した中学生は当時０歳～２歳です。当時の記憶はほとんど無く、かろうじて地元を離れ避難生活をしていた事を覚えている程度です。そんな南相馬市の子ども達が、被爆７８周年目の平和記念式典や現在の広島市の様子を直接自分の目で見て、そこで生活している人々と交流することで色々なことを感じることができました。今復興に向け取り組んでいる南相馬市を改めて見つめ直したとき、すぐに行動や成果を上げることはできないかもしれませんが、この４泊５日間の思い出は大きな記憶として残り、これからの生活において広い視野からの物事を見つめ考える手だてを得たことは財産だと思います。

そんな充実したそして楽しい思い出に残る４泊５日となるように、色々と工夫された内容の行程を企画してくださったピースボートの橋本さんには感謝の気持ちでいっぱいです。その他にも、親子参加での事前説明会では保護者も安心して参加させられるための配慮や、期待感をふくらませるような事前学習資料の作成もして頂きました。行程の内容も、平和公園ガイドツアーや被爆証言の聴講だけではなく、食文化や、世界遺産の見学、学校で学習することのない側面からの平和教育や、体験学習を通しての現在の広島の姿に触れることができました。宿泊場所も海外からの宿泊者の多いところを用意して頂いたため、国際交流を深めることができました。そして、一日の日程を終えた後に、橋本さんの進行で実施した振り返りの時間では、みんなで話しあったことがより深く楽しい思い出となりました。

最後に今回のツアーにご協力くださった皆様に感謝申し上げます。この企画は南相馬市の明るい将来の種となることと思います。ありがとうございました。

（南相馬こどものつばさ：引率スタッフ　佐藤慎治）